

平成29年2月13日(月)

老球の細道305号

育行へ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

かつて明治大学ラグビー部は全国大学選手権大会優勝20回、日本選手権優勝1回の日本大学ラグビー界では名門中の名門で、「重戦車」と呼ばれる強力大型フォワードが特徴のチームであった。ラグビーはド素人の伝説の名監督北島忠治氏が1929年から67年間指揮を執り、彼が言い続けた「前へ！」を合い言葉に日本の頂点に君臨し続けた。

後ろへ引くこと、逃げることを絶対に許さず、理屈抜きで常に「前へ！」と言い続けたという。有名なエピソードで、北島氏の奥さんが臨終の時に言った言葉が「明治、前へ！」というから何とも凄まじい徹底ぶりであった。また、氏の指導方針としてまとめられた『明治大学ラグビー部十訓』もこれまた凄い。広告代理店「電通」の社訓よりすさまじい。

①監督、委員の命を守れ ②技術に走らず精神力に生きよ ③団結して敵に当たれ ④躊躇せず突進せよ ⑤ゴールラインにまっすぐ走れ ⑥勇猛果敢たれ ⑦最後まであきらめるな ⑧低いプレーをせよ ⑨全速力でプレーせよ ⑩身を殺してボールを生かせ

現役教員の頃の「体育理論」の授業であった。会議室で行ったので座席は自由とした。生徒の人数に比べて会議室の席は有り余るほどの余裕綽々。生徒の座る状況を観察するとどこに行っても同じ。後ろの方から埋まり、前の方はがら空きとなる。大人達の講習会とか研修会などもほぼ同じような様相を示すのが日本の現状である。

「モチベーションが低く、自信のない者の集まりは後ろの方から埋まっていく」

日本体育協会主催の上級コーチ資格取得の講習会となるとこうはいかない。各種目から日本のトップクラスを目指すコーチ達が集まって勉強をする。この講習会だけは別世界である。講義室は前から埋まり後ろが空く。講義時間に間に合うからとちょっとでもゆっくり行くと前の席はすでに埋まっている。前に座らないと講師の声は聞きにくいし、板書は見えにくいし、映像も見えにくい。ほとんどの指導者が「学びの鬼」と化して講習会に参加してくるので最前列の席の争奪戦は激しい。

「モチベーションが高く、自信と向上心旺盛の者の集まりは前の方から埋まっていく」

バスケットボールの県大会でも同じような様相が見られる。開会式では前年度優勝チームは必ず最前列に座る。席が決まっているわけでもないのにそこに座る。その他多勢のチームはほとんど後ろの方に席をとる。例外はかつて勤務したA高校。前年度優勝チームは優勝トロフィーを返還しながら今年も奪還することを決意する。それを阻止しようとするA高校はたいした強くもないくせに最前列に座り、返還シーンをすぐ目の前で見ながら次は俺たち番だと強く決意する。後ろに座っていても眠くなり、優勝杯を手にすることが他人事になってしまう。

色々なところで私たちの潜在意識が出る。前へ出ることは、前向きに取り組むことを動機づけし試練の恵みを与えてくれる。後ろへ引くことは、自らをぬるま湯に導き安逸の地獄へと突き落として行く。できればどんなことにおいても、どんな場所においても、常に「前へ」を原則として生きてゆきたいものである。

かつて、深雪で埋まったA高校グラウンドを走りながら口ずさだ高村光太郎『道程』の一節「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる」。まさに「前へ」の決意であった。